五穀豊穣を寿(ことほ)ぐ、神々との祭典。

暮らしの中で、脈々と息づいてきた伝統芸能・神楽。
RCC早春神楽共演大会は
「五穀豊穣を寿ぐ神々との祭典」をテーマに
神楽そのものを見つめ直すとともに
将来の在り方を模索し、更なる向上を目的とする、
素晴らしい大会をめざします。

画／山根久明

2011年 RCC早春神楽共演大会

日時

2011年2月27日(日) 開場 午前8:45 開演 午前9:30

場所

広島市文化交流会館大ホール
(旧広島厚生年金会館)

入場料【税込・全席指定】

S席5,500円 A席4,500円
(※当日券は各1,000円増)

演目・出演団体

第一部 原点を見つめる

「岩　　戸」石見神楽亀山社中(島根県浜田市)

第二部 伝統を受け継ぐ

「鍾　　馗」三谷神楽団(安芸太田町)
「八岐大蛇」後野神楽社中(島根県浜田市)
「安達ヶ原」川北神楽団(安芸太田町)

第三部 新たなる神楽への挑戦

「厳　　島」琴庄神楽団(北広島町)
「戻り橋(前編)」原田神楽団(安芸高田市)
「羅生門」大塚神楽団(北広島町)
「大江山」上河内神楽団(安芸高田市)
「紅葉狩」横田神楽団(安芸高田市)
「青葉の笛」中川戸神楽団(北広島町)

チケットのお求めは

RCC文化センター(082)222-0044／デオデオ本店(082)247-5111／アルパーク天満屋(082)501-1745
ひろしま夢ぷらざ(082)544-1122／福屋広島駅前店チケットサロン(082)568-3942
コムズ安佐パーク(082)810-2000／フレスタ加計店(0826)22-2155／フレスタ沼田店(082)830-1700
千代田サンクス(0826)72-3939／チケットぴあ(0570)02-9999(Pコード409-144)

■主催:中国放送・RCC文化センター　■お問い合わせ:RCC神楽実行委員会(RCC文化センター内) TEL(082)222-0044

2011年RCC早春神楽共演大会

第一部 原点を見つめる

岩 戸　石見神楽亀山社中（島根県浜田市）

太陽・天照大神は、弟・須佐之男命（すさのおのみこと）のたび重なる乱暴に立腹され、天の岩屋へお隠れになりました。すると、天も地も常闇（とこやみ）の世界となり、悪神がはびこり、作物は枯れ、不安な日々が続きました。そこで、児屋根命（こやねのみこと）をはじめ、八百万（やおよろず）の神々は、大神のお出ましを相計り宴を開きました。宇津女命（うずめのみこと）が舞い踊ると、この騒ぎを不思議に思われた大神が少し岩戸を開かれ、これを待ち受けていた手力男命（たちからのみこと）が押し開いて、めでたく大神をお迎えします。世の中に光と平和が戻ったのです。これは、わが国の神話として伝えられ、中でも宇津女命の「舞」は神楽の始まり、わが国の芸能の起源とされています。そして、日本人は、古代より自然崇拝の暮らしを築いてきたことを伝えます。

第二部 伝統を受け継ぐ

鍾 馗　三谷神楽団（安芸太田町）

鍾馗（しょうき）は、中国や日本に伝わる魔よけの神様です。中国では唐の時代、玄宗（げんそう）皇帝が長い病に伏せっていたところ、夢の中に鍾馗が現われて神通力で病魔を追い払いました。皇帝が夢から覚めるとすっかり病が治っていました。神楽では、須佐之男命（すさのおのみこと）の化身が鍾馗大神と名乗って、民の命を奪おうとする疫病の悪鬼を退治します。左手に持つ丸い輪は、悪病の払いに用いる茅の輪で、姿なき鬼神をこれで捕らえ、右手の剣で倒します。

古来、人の世には四百四種類の病が在ると言われます。備後（びんご）風土記には、蘇民将来（そみんしょうらい）という伝説があります。この物語は、みすぼらしい姿の武塔神（むとうしん）が一夜の宿を蘇民将来に頼んだところ、貧しいながら温かくもてなしました。翌朝、神さまは蘇民とその家族に「茅の輪」を腰に巻くよう言い残して去りました。間もなく、村中に疫病が流行りましたが、蘇民たちは助かったという話です。

八岐大蛇　後野神楽社中（島根県浜田市）

出雲の国に暮らす足名椎（あしなづち）・手名椎（てなづち）老夫婦には八人の娘がいました。しかし年毎に一人またひとりと大蛇に飲み取られ、七人まで娘を失いました。そしていよいよ八人目の姫が飲み取られる季節となり、老夫婦と八人目の姫・稲田姫（いなだひめ）は嘆き悲しんでいました。そこへ高天原（たかまがはら）から舞い降りた須佐之男命（すさのおのみこと）が通りかかり、その訳を聞きます。命は、大蛇退治を決め、老夫婦に八塩折（やしおり）の毒酒を造らせ酒を入れた樽の後に姫を立たせます。やがて、どこからともなく大蛇が現れ、毒酒に映った姫の影を飲み干していきます。酔いの回るほどに暴れ狂い、しだいに酔い伏してしまいます。これを待ち構えていた命は、壮絶な戦いの末、大蛇を退治します。更に大蛇の腹を切り裂くと、にぶい音と共に一本の刀が出てきます。これを天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）と名づけ、天照大御神（あまてらすおおみかみ）に捧げることにします。そしてめでたく稲田姫を妻とし、平和で豊かな出雲の里で暮らしていくという物語です。

安達ヶ原　川北神楽団（安芸太田町）

平安時代の中頃、鳥羽上皇が玉藻前(たまものまえ)という美女を寵愛されるようになると、体調を崩され世が乱れ始めます。

これを不審に思った陰陽師・安倍泰親(あべのやすちか)が玉藻前を占うと、玉藻前は唐の国で悪行を重ねた末、わが国へ逃亡した金毛九尾(きんもうきゅうび)の悪狐だったのです。この悪狐は、正体を見破られると京の都から安達ヶ原へ飛び去り、再び美女に化けて旅人を襲うようになります。

那智(なち)の大法師・東光坊阿闍梨祐慶(とうこうぼうあじゃりゆうけい)は剛力を従え修行の途中、陸奥国安達ヶ原(むつのくにあだちがはら)にさしかかったところで日は暮れてしまい、出会った美女に一夜の宿を借りようとしますが、美女は悪狐となり襲いかかり、剛力は食い殺され、法師は辛うじて逃げ去ります。そして、弓の名人三浦乃介・上総乃介(みうらのすけ・かずさのすけ)が悪狐退治に向かい退治する物語です。

第三部 新たなる神楽への挑戦

厳 島　琴庄神楽団（北広島町）

今から千四百年の昔、須佐之男命を御親とする市杵島姫(いちきしまひめ)を含む三女神は、国家鎮護を願い瀬戸内海を東に向かいます。やがて、気高い山のある美しい島に辿りつき、この荘厳な地に鎮ります。その後、この島は厳島と言われるようになりました。

それから五百年の後、平安時代も終わり頃、安芸守(かみ)となった平清盛は厳島に参拝し、霊験の灼(あらかた)な厳島を平家一門の守護神とします。

このご神徳により清盛は、平家の棟梁から太政大臣という天下人へと大出世し、平家一門の全盛期を築きます。『清く盛(さか)えよ清盛』と育てられ、天運によって『この世の春』と謳歌する清盛は、平安建築の粋を極め、瀬戸内海の風景も取り込んだ壮大な厳島神社を建立したのです。

その頃出世の道々、葬(ほうむ)り去った政敵の僧侶・公家・源氏の怨霊が清盛を襲ってきます。この怨霊は、陰陽師と清盛の四男・知盛(とももり)の助力を得て祓うものの、清盛は次第に熱病に侵され帰らぬ人となります。

清盛の死と共に時代は大きく変わり、平家一門は、壇ノ浦で滅亡します。その終わり、清盛の妻・二位の尼時子は、幼き安徳天皇をかかえ『波の下にも都(みやこ)は候(そうろう)ぞ』の言葉と共に入水します。数年の後、時子の骸(なきがら)が厳島の岸へ流れ着きます。国家安泰・平家の繁栄を夢見て建立された厳島。清盛・時子は互いに慈しみながらめぐり来るわが国の時代と人を永遠に見守っているのです。

戻り橋（前編）　原田神楽団（安芸高田市）

大江山、酒呑童子の手下、茨木童子は夜ごと戻り橋あたりに出没しては、災いをかけ、都人を悩ませていました。そこで、都の守・源頼光は四天王の一人渡辺綱を鬼神征伐向かわせます。

茨木童子は老女に化相し、通りかかった傘売り善兵衛に、傘を買うからと言って近寄り襲います。そこへ、勅命を受けた渡辺綱が駆けつけ、合戦となりますが、茨木童子の妖術にかかり、命が危うくなります。

しかし、石清水の御神告により、源頼光と坂田金時が加勢し、茨木童子の左腕を切り落とすものの、鬼は北の空へと逃げ去ってしまうという物語です。

羅 生 門　大塚神楽団（北広島町）

平安時代、京の都が開かれた時、都の玄関として偉容を誇った羅生門は、世の中が乱れてくると崩れるにまかせ、哀れな姿を晒していました。そして身寄りのない死人が投げ込まれたり、鬼が棲むと言われるようになりました。

この羅生門の近くにある渡辺綱の館に、戻り橋で切り落とした鬼の片腕を隠していました。

そこへ、綱の乳母が現われ、鬼の腕を見たいと言います。綱は、陰陽師の言葉に従い見せることは出来ないと拒みますが、ついに見せてしまいます。この乳母は、綱の本当の乳母を食い殺して乳母に化相した酒呑童子だったのです。酒呑童子は、片腕を取り返して茨木童子の手に戻すと『水火の術』で綱に襲いかかります。これを予感した源頼光は、綱の館へ急ぎ、綱に加勢すると、酒呑童子と茨木童子はふたたび『虚空飛天の術』によって北の空へ飛び去ったのでした。

大 江 山　上河内神楽団（安芸高田市）

平安時代の中頃、一条天皇の御代、丹波国大江山に酒呑童子という悪鬼が多くの手下を従えて立てこもり、都はもとより付近一帯の村里に出没し、悪事の限りを尽くして庶民を苦しめていました。

帝は当時、都の警護の任にあたっていた武勇の誉れ高き、源頼光（みなもとのらいこう）に大江山鬼神征伐の勅命を下されました。頼光たちは、石清水八幡、熊野神社、住吉神社に参拝し、大江山に向かう途中、三世ケ託の神が現れ、御神酒を授かります。一行が酒呑童子の岩屋へと急ぐ途中、都からさらわれてきた紅葉姫に童子の岩屋へ案内させ、一行は童子とのはげしい問答の末、宿を許されます。一行は、携えてきた御神酒を童子たちに振るまい、酔い伏したところで、一気に切り込み、大激戦の末、見事に討ち取るという物語です。

紅 葉 狩　横田神楽団（安芸高田市）

平安時代の中頃、武勇の誉（ほま）れ高い信濃の守・中納言平維茂（たいらのこれもち）は、「信州・戸隠山に棲み、世の中に災いを及ぼしている『鬼女』を退治せよ」との勅命を受けます。維茂主従は、戸隠の険しい道を登りますが季節は秋、艶やかに色づいた紅葉は陽を受けて燃えさかる炎のように美しい景色の中で、姫に化身した鬼女が「紅葉狩の宴（うたげ）」を開いていました。主従は誘われるまま宴の客となり、酔い伏してしまいます。麗しき姫は、正体を現し取り食らおうとしますが、その時維茂が日頃より信心する八幡大菩薩の使神・竹内ノ神が現れ鬼女を追い払い『神剣』を授けます。正気を取り戻した主従は、鬼女との戦いに挑み、退治します。

青葉の笛　中川戸神楽団（北広島町）

仁明天皇の時代、信州信濃の戸隠山のとなりの荒倉山に素晴らしい音色の笛「青葉の笛」を持つ官那羅（かんなら）がいました。笛の音はしじまを渡り、都にまで届いたと言います。帝の勅命を受けた在原業平は、笛の名手に化け、官那羅の持つ「青葉の笛」をだまし取ります。官那羅の手下の九鬼と御影は、京に上り笛を奪い返し、業平の命も狙いますが、業平は諏訪明神によって助けられます。帝の強力な力によって人の幸せは踏みにじられ、しかも鬼にされて討たれるという物語です。